木々高太郎全集

6

随筆・詩・戯曲 ほか

朝日新聞社

木々高太郎全集
6

随筆・詩・戯曲 ほか

定価 980 円　　昭和46年 3 月25日　第1刷発行

著　者　木々高太郎
著作権者　林　峻一郎
装幀者　原　　弘（NDC）
発行者　朝日新聞社　角田秀雄
印刷所　図書印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
東京　大阪　北九州　名古屋

© *Shunichiro Hayashi 1971*

0393—240086—0042

木々高太郎全集6

目次

随筆

I

故郷とその中学……11
私の出発……16
パヴロフ先生をしのぶ……22
私は最後の弟子だった……24
ヒポクラテスの全集……31
Logico-physiologicus……33

II

秋空と真理……40
匂いと条件反射……45
百の仮説……49
比喩と比論……52

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

思想としての条件反射学……57
身のうちの生物……76
汎化と分化……83
憧憬……85
科学者と情熱……87
投射と予備……93
感覚と表現……98
文学における実感について……101
『明暗』について……109
ドストイェフスキイの研究……114
ドストイェフスキイの癲癇描写……132
自意識と理解……136

Ⅲ

劇作論……151

日本詩の音律……155
福士幸次郎とその作品……157

Ⅳ

江戸川乱歩論……164
小栗虫太郎論……167
探偵小説二年生……170
いよいよ甲賀三郎氏に論戦……173
探偵小説におけるフェーアについて……179
批評の標準……185
『人生の阿呆』自序……190
新泉録（A）……193
探偵小説の評論について……208
新泉録（B）……210
推理小説の範囲……220

探偵小説の地位の向上……223
探偵小説の本質……226

詩

渋面（詩集）……237
序詩(237)　Ⅰ 青春の流謫(238)　Ⅱ 自画像(245)
Ⅲ 幻想の祖母(253)　Ⅳ 訳詩(262)
月光と蛾（詩集）……282
Ⅰ 印度木蓮(282)　Ⅱ 小曲(290)　Ⅲ てんとう虫(293)
Ⅳ 堕落(303)　Ⅴ 月光と蛾(308)

遺稿詩篇・絶筆

遺稿詩篇……327
絶筆……337

戯曲

上品下品（一幕二場）……365

初期作品

家出（小説）……393

*

作品解説　須田　勇……415
中島河太郎……420
金子光晴……424
木々高太郎年譜……429

木々高太郎全集6

随筆・詩・戯曲ほか

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

随

筆

I

故郷とその中学

甲府を見るには㈠天守閣から近く俯瞰するか㈡愛宕山の上から見下すか、そうでなければいっそ㈢勝沼駅の大観望から遠く見るか、㈣和田峠より富士とともにのぞむかという案を出したところ、㈣がいちばんであるという結果になった。

和田峠というのは甲府より西に一―二里で、昇仙峡へ行く途中にある。ここからは眼下に甲府の街を、そして遠くその向うに盆地平原をへだてて富士山を望見できる。

甲府の街のうちいたるところ温泉が出るようになってから時代が遷ったであろう。私の知っているのはその前の時代だ。夏は暑く（関東第一）冬は八ヶ岳颪が毎日吹いて辛い。しかし春はうって変っておだやかで、うるんだような桃が咲き、しっとりとした桜が咲く。秋は空がすんで高く、静かで清涼で、つまり春と秋とは類なく美しく気持がよい。

誰もいわぬが山を基とした夏雲の壮観、今はさしたることはあるまいが、産物は水晶と印伝の袋もの、それになんといっても秋から冬へかけての葡萄。これだけは日本葡萄と称して甲府の誇るもので誇るに値いするもの。故郷となればどんな荒地でも懐かしかろう。私はそこで、のんきな中学時代を過したのがありがたかった。

私は山梨の出身で、甲府盆地の南の一寒村に生まれた。代々医師で、聞くところによると、私の父が六代めである

というから、私は臨床医ではなかったが、私が七代めということになる。

父は長命で齢九十四歳の春死んだ。父の時代に、故郷をすてて、甲府に出、さらに東京に出て来た。それまでは医師だけで食えないので、半分農業を営んでいたから、半農半医だったわけで、私も百姓をしたし、百姓のことをよく知っているのは、そのためである。

父から聞いたところによると、子供の一人を必ず医師にするというのが家憲であった。それで私の長男も医科大学を出、医師国家試験というのをうけ、医師免許証をとったが、とたんに医師になるのはいやだと言い出し、文学を志した。これでわが家の伝統は終る。私に出来なかったこと、すなわち一家の呪縛を、はじめてうち破った点、わが子ながらあっぱれである。

1　わたしの母校

さて、私の甲府中学(注)に在学したころ（大正年間）は、山梨県には、二つの中学（甲府中学と日川中学）と二つの高等女学校（中学程度の女子の学校、一つは甲府高等女学校、一つは英和女学校）しかなく、他の県が当時の高等学校、大学を持っていたのに、山梨県では甲府中学が最高学府であった。

そのために、甲府中学の五年生（当時の最高学級、今の甲府一高の二年生）ともなると、県下の文化を一身に背負うといった観があり、たとえば、中学五年生の発言が、新聞でとりあげられたり、県会でとりあげられたりした。私どもは、その思い出を快いものに思う。

第二の快い思い出は、私の在学中は校長が大島正健（後の文学博士、札幌高等農学校の出身。新渡戸稲造とともにクラーク博士の弟子）という人であった。従って、根は自由主義の人、思想上の束縛などは一つもなく、私は当時、内村鑑三、木下尚江などの本を読み、ニーチェやショーペンハウエル、さてはトルストイやドストイェフスキイの翻訳を自由に読んだ。キリスト教の教会や芝居や映画などにも自由に出入りした。中学五年生のときに、校長がかわった。

第三は、英語の先生に野尻抱影（大佛次郎の実兄であったことをあとで知った）という人がいて、三年生になると、その人から英語を習うのだといって先輩からいくども聞かされているところをみると、この人が相当の影響を与えていたであろう。私が三年生になったときは、この人はやめていたが、そういうふんいきは、みんな英語がよく出来たことを意味しよう。それに中学に珍しく、英人教師がいた。これは全国に類のない大島人事であろう。はじめマンロー

という人、次にリーランドという人に私どもは習った。

第四に、しかし、一般の教育（ここでは県民教育の風潮を意味する）は、武田信玄、山県大弐を範とし、世界史的な視野がなかったのは残念で、戦国時代の一武将にすぎないような人物をなぜ県民教育の範とするのだと言って、私はおおいにしかられた。甲府中学が甲府一高になった以後、私は何も知らぬが、今でもそんなことであったら、やめねばならぬと思う。

第五に、思い出はなつかしい。当時の甲府中学は天守閣を見上げる甲府城跡を占め、外堀をわたる擬宝珠（ぎぼうし）のある太鼓橋、それから黒い大きな門、信玄流の巨石をつんだ高い石垣、ハスの花が咲き、アシの花も咲く。青い穹隆には白い雲悠然たり、春は無風で桜咲き、秋は夜空に天漢（天の川のこと）白く引く。

天下の志を秘めて学ぶによく、万巻の書を抱いて青春を惜しむによい。だれも持つであろう、遠いわが中学の母校に、限りなき追憶をおくりたい。

（注）甲府一高　寛政八年（一七九六）徳川幕府が設けた甲府学問所が前身。文化二年（一八〇五）徽典館と改称、さらに、開智学校、師範講習学校、山梨県師範学校と変り、明治十年、山梨県師範学校内に中学予備科を新設、同十三年十月二十三日、中学校開校式を行なう。創立記念日はこの日。三十三年、旧舞鶴城内に校舎を新築、山梨県中学校と改称、翌三十四年山梨県第一中学校となった。三十五年に元首相石橋湛山、三十七年に俳人飯田武治（蛇笏）、建築学者内藤多仲氏らが卒業した。三十九年、山梨県立甲府中学校と改称。四十五年日本郵船会長浅尾新甫、大正五年元日本開発銀行総裁小林中、同十一年三井物産社長水上達三氏らを送り出す。昭和三年、甲府市美咲二丁目の現在地に移る。二十三年、新制高校となり、山梨県立甲府第一高等学校と名を改めた。

2　寸　信

私が学んだ甲府中学（現在の甲府一高）の大島正健校長の記念碑が昨年つくられたことを知り、なつかしい気持でいっぱいです。大島先生にはかなり自由主義的な教育を受けました。ほかの同年配の人たちの話を聞くと、まるで動物のような中学生活を送った人が多いのに、私たちは一人前の人間として扱われてきたということは実にありがたかったと思っています。

いまの教育はむかしのようなものではないでしょうが、学校を牢獄としないで自由にものを考え、本を読める生活でありたいものです。

年頭に当り、とくに学生諸君に考えていただきたいことがひとつあります。私たちは世界一偉いのは武田信玄だと教え込まれてきました。それに反撥すると学校の先生や先輩からひどくどやされた記憶があります。

しかし信玄は戦国時代の地方の一武将にすぎません。世界史の中で、本当に人類の誇りとするに足る人物を模範として若い学生生活を送るべきでしょう。

3　雑穀に感謝する

私の時代には中学は五年制で、それからあと高等学校三年、大学へと進学する制度だった。

私はいなかの中学へ入学して、一年生から三年生までいなか（父の実家）から通った。朝六時に出発する。そして盆地のゆるい傾斜の道をゆっくり歩いて、二時間半から三時間。二里半の道を歩いてやっと中学の校内に到達する。

そして午後三時におわると、そのまま学校にぐずぐずしていないで、家路をたどる。もちろん、冬は途中で暗くなってしまう。いなか道はちょうちんがなければ歩けないから、朝出るときにちょうちんをカバンの中に入れていくというありさまだ。

さて、食事はどうしたか。昼の弁当はアルミニウムの大きな弁当で、白米をつめていくのである。学校でくれるお湯をアルミニウムの弁当箱の中にそそいで、手をいっしょにあたためてから食べるというわけである。

どんなものを食べていたか。昼には白米だったが、朝と夜の食事の半分は、雑穀であった。その雑穀のうち、私はトウモロコシが好きであった。今でもトウモロコシというものには、特別の好みがある。

しかし中学の友だちには、雑穀などは食べていないというもうそをついていたが、内心では、雑穀の生活が不満でもあり、はずかしくもあった。

それから、大学を出て、生理学という学問を勉強し、やがて大脳生理学という学問を研究することになって、やっと頭をよくする方法を学問的に明らかにすることができるようになってきた。

その結果、私は中学時代に主として雑穀を食べていたことを、感謝するようになった。白米を食べていると、人間の頭はだんだん悪くなる、それは、ビタミンB類がはいっていないので、頭を働かせるためのたいせつな物質が頭の中で製造されないからである、という理屈がわかってきたからである。

さてもう一つの話は日本に軍隊のあった時代に、陸海軍

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.